

訪中報告 四
勤労千葉執行委員
布施宇一

二回にわたり、貴重な紙面を借りて経過報告的に訪中報告をしてきましたが、最後に、交流・見学の中で感じたことを述べて報告を終りたいと思います。なお、不十分な点については、報中団として報告集をまとめることとなっており、できあがり次第、各支部へお届けしたいと考えておりますので御参照下さるようお願いいたします。

社会主義建設への熱意

訪中することが決まったとき、自分なりに見て、自分なりに考えてみたいと思うことが二点ほどありました。

その第一は、一九四九年の中国革命が、アメリカにおけるマッカーシー旋風(赤狩り)や日本における反共民同の成立等々、世界中に衝撃的影響を与えたように、十億の人口と広大な国土、豊富な天然資源をもつ中国の世界的影響力は現在も変らない、その中国の風土と生活の実態を自分の目で見てみたいということでした。

革命以降の中国は、資本主義による産業の成熟を十分に経験する前に植民地主義によって収奪されたということも含め、十億の人民が十分に満たされる経済基盤の確立について、極めて苦難の道を強制されてきました。文化大革命を経て、中国は今、この経済の成熟を社会主義のもとで成し上げようとしているように見えます。

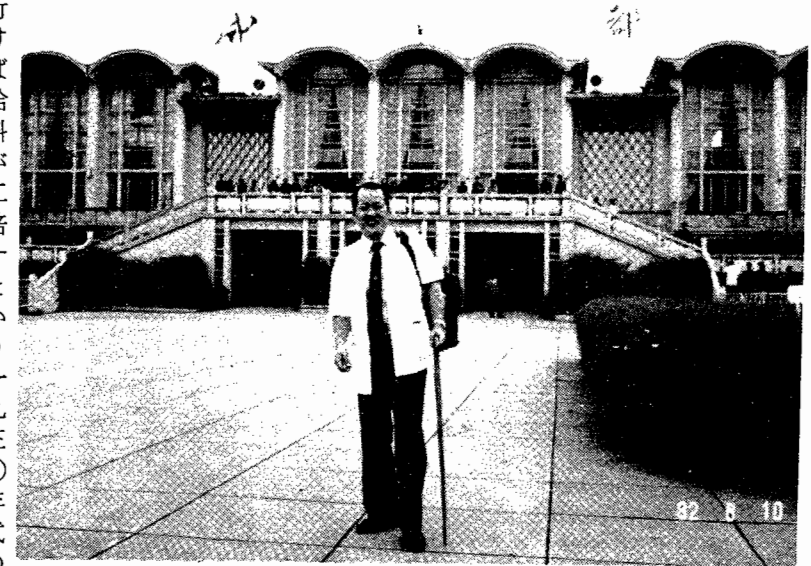
中華全国総工会を訪問した際の陳宇副主席の話、成都市で中国々際旅行社の全線随行員・羅戟氏を講師に開催された中国の新憲法についての学習会での論議、街々にかかげられた「人口調査を成功させよう」というスローガンや「晩婚」「子供は一人」を奨励する掲示、そして、街頭や飯店や様々な場所でも不充分ながらも交した中国の人々とのふれあいなどで、中国の祈りにも似たこの熱意を痛いほどに感じる事ができました。

しかし、あらゆる意味で、十億の中国人民の動向と無関係ではありえない日本人のひとりとして、この壮大な試みをぜひとも成功させてほしいと思いつつも、「晩婚」「子供はひとり」「労働者のスト禁止」などという事について、全人民的合意が可能なかどうか、さまざまな意味での疑問を感じたこともまた事実です。

「日中戦争」―中国侵略

―三里塚・ジェット闘争への確信―

訪中に当って考えたことの第二点は、私自身が北京市で生まれ、四才まで北京市で育ったということ、私の父が、まぎれもなく中国人を苦しめた侵略軍の一員であると同時に、「満



'82年6月10日、四川省・成都空港にて、布施執行委員。

州へ行けば給料が二倍」という一九三〇年代の状況に追われて中国へ渡り、二十代前半から四十才近くまでの、人生で最も働ける時期の蓄積を敗戦によって全て奪いとられた犠牲者でもあるという個人的な体験も含め、日本の中国侵略―戦争の問題を中国現地で考えてみたいということでした。

中国側の公式見解は「中日両国人民は犠牲者であり、帝国主義、植民地主義を階級苦としてとらえなければならぬ」ということですが、感情も含めそれ以上のものが、中国人民の中にあることは当然であり、そのことを中国現地で自分なりに見てみたいということでした。

その意味では、第一回県労連訪中団に参加した白井幕張支部長が「日本人であつたら、南京市へ来たら、ここを素通りしてはならない」と指摘した南京大虐殺の犠牲者を祀る「雨花台烈士陵」などが日程から外れていたことは極めて残念なことでした。

しかし、中国人民の生活を自分なりに見て、「日本軍の中国侵略」を「進出」と書き改めさせる教科書検定が強行される情勢の中で、勤労千葉がこの間、「三里塚と国鉄」を基軸に軍事大国化阻止へ向けて、真に闘争戦線の構築を目指していることに、さらに確信を深めることができたと思います。

以上、極めて不充分だとは思いますが、全組合員みなさんに再度お礼を申し上げて、訪中報告を終わります。